

【ポスター発表】

**「連携」「協働」の前提にあるソーシャルワーカーの「越境」の課題
—ソーシャルワーカーが自らの実践環境を整えるための方略—**

聖隷クリストファー大学 川向雅弘 (7586)

キーワード：連携・協働、越境、実践環境の醸成

1. 研究目的

昨今強調される多機関・多専門職の「連携」「協働」が機能するためには、それぞれの機関・専門職が自身の支援領域において「マージナルな活動領域＝裁量的活動領域」を広げ、それを連携の「のりしろ」として重なり合うような連携関係（＝協働）の必要に対する共通認識が課題となる。すなわち、「連携」「協働」の前提として、「経年のうちに既成事実化した支援の守備範囲（スタンダード）から一步踏み出す実践（＝ソーシャルワーカーの越境）」に対する、機関とソーシャルワーカーの主体的態度の必要である。

しかし、繰り出される新たな制度や制度改革等による実践現場の混迷と疲弊を背景として、「無責任なニーズのキャッチボール」「責任の押し付け合い」といった「連携」「協働」の阻害状況が数多く報告されている。このような実践現場の状況は、前述のような多機関・多専門職の有機的な関係形成が容易くないことを意味している。そこで、本研究では、①「ソーシャルワーカーの越境」の阻害要因分析、②有機的な関係性の構築が可能となるためのソーシャルワーカーの実践環境の課題、③ソーシャルワーカー自らが取り組む実践環境醸成の方略について検討する。

2. 研究の視点および方法

A市の社会福祉法人B会が運営する17か所の地域ケア活動拠点（地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、地域活動支援等の機能を併設）に配置されている5職種（保健師等、社会福祉士、主任ケアマネジャー、生活支援コーディネーター、ケアマネジャー）の専門職の中から10名を対象にインタビュー調査を実施した。インタビューの内容は、①既成事実化した支援範囲から「マージナルな活動領域＝裁量的活動領域」へ一步踏み出す支援への意識について、②「マージナルな活動領域＝裁量的活動領域」へ一步踏み出すことを困難にする障壁について、③ソーシャルワーカーとしての「障壁」への向き合い方についてとし、個人の意識と実践現場の実際を自由に語ってもらった。

3. 倫理的配慮

研究対象者が、組織上、業務上、人間関係上で不利益を受けないように、研究対象者選定の手続き、インタビューの実施方法、データ保管と廃棄、研究の公表等において、特に個人の匿名性と安全性の確保のための配慮を日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に基づき行った。さらに、研究の手続きと進め方の詳細について、聖隷クリストファー大学倫理委員会研究倫理審査にて承認を得た。

4. 研究結果

インタビュー調査のデータ分析過程でつぎのことが明らかとなった。

「ソーシャルワーカーの越境」の阻害要因は、①昨今の制度適用へ偏重した支援の一般化、②ソーシャルワーク倫理と価値よりも手段的価値を優先せざるを得ない制度構造、③専門職・機関の細分化・縦割化による支援領域の既成事実化、機関・専門職テリトリーの顕在、④フレキシブルな雇用形態の一般化といった諸相が実践現場にもたらしめている混迷状況の一端にある。しかし、「ソーシャルワーカーの越境」に直接的に影響をもたらす要因は、一つには専門職としてのソーシャルワークの意識化、二つにはソーシャルワーカー自らが自身の実践環境に対して日々働きかける、ソーシャルワークに対するコンセンサス構築、三つには、そのために、対立や決裂を避けながら行う、組織・機関・職員集団等との「対話」の有無である。すなわち、「ソーシャルワーカーの越境」の阻害要因には、制度構造的な諸問題が色濃く影響しているが、一步踏み出す実践を指向できるソーシャルワーカーは、ソーシャルワーク・アイデンティティの構築に向けて、自らの実践環境の醸成を日常的に意識し実践している。

5. 考察

インタビューにおける「ソーシャルワーカーの越境」を可能にする実践上の具体的な方法や工夫についての語りは、ソーシャルワーカー自身が自らの実践環境を整えていくための方略として示唆される。

(1) 組織コミュニケーションを図る

組織や職員集団といった実践環境のアセスメントの必要が指摘されている。そして、現実場面でワーカーが直面する「障壁」とは、その多くは上司・同僚等の人為的判断場面に生じることから、共通認識を持って目標に向かう意思疎通が重要であり、実践の必要根拠を裏付ける説明と理解や共感を育む工夫を厭わない態度、すなわち「対話」が組織や職員集団への具体的な介入方法の一つである。

(2) 支援を孤立させない—利用者、同僚、他機関、他職種の支持を得る

支援チームの中で自分が何をする専門職であるのかを、チームメンバーや利用者が理解できることは必須で、そのために、自身のワーカーとしての理念、用いる支援の方法、立場等、そのアイデンティティを明確にすることが必要である。その上で、利用者、チームメンバーの同意を得ることが、ソーシャルワーカー自身の役割を肯定する。

(3) 気づきを得る—内省の装置を身近に用意する

スーパービジョンが根付かない実践現場状況の中で、「ワーカー自身に支援が必要である」との視点を持ち、自らが置かれている状況にあった工夫をし、身近な人的資源を担ぎ出し、まずは意識ある仲間での試行錯誤がされていた。重要なことは、スーパービジョンの形式ではなく、些細な疑問や問題意識、気づきを共有し、自身が仲間に繋がっていく「場」を、ごく普通のソーシャルワーカーの身近に創り出すことである。